

## 中国・台湾の竹家具 －アノニマスデザインの系譜－

Bamboo Furniture in China and Taiwan -A Genealogy of Anonymous Design -

デザイン学科プロダクト・デザインコース

車 政 弘

Masahiro KURUMA

### 1. はじめに

中国の竹家具について考えるようになった契機は中国陝西省の農村で使用される木製の小さな腰掛け「小凳子＝シャオダングズ」を見、また同様の脚部の構造を持つ椅子を見てからであった。シャオダングズの構造とサイズの特異性は明式家具、清式家具のような中国を代表する貴族的な家具の趣とは異なり、庶民の生活を支えるつつましいものであった。また同様の構造を持つ椅子も高級な中国家具の系譜とは違う構造であり、素朴な表情を持っている（図1）<sup>1)</sup>。

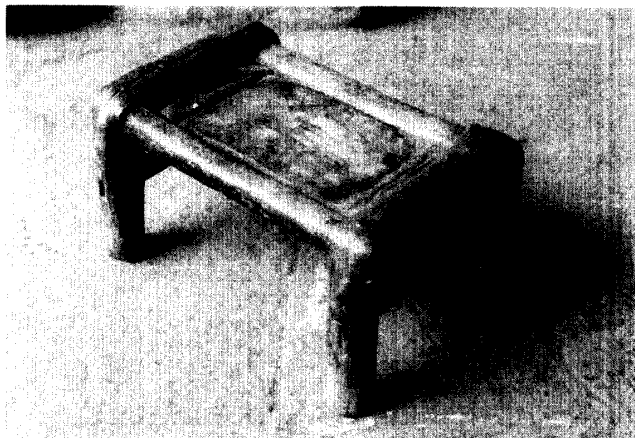


図1 小凳子＝シャオダングズ

さらにこの木製の腰掛け、椅子と同様な構造の竹の腰掛けや椅子をあちこちで見えるようになった。上海の街角や近郊農村、雲南省でも見かけたし、さらに台湾では竹家具製作、販売に従事している人達に何回か話を聞くことができ、製作の過程を記録する機会を得た。

中国の竹家具については美術家具関係の文献では、あまり触れられることがない。ルドルフP. ホムメルCHINA AT WORK, 邦訳『中国手工業誌』に少し詳しくその特徴が記載されるのみである<sup>2)</sup>。

現代台湾を中心に竹家具製作技術がどのようなものであり、中国、台湾の竹家具の種類とデザインの多様性について紹介し、その位置づけについて考察を試みるのが本稿の目的である。

竹家具というと東南アジアの例もあるが、本論では中国江南地方を中心に発展したと考えられる竹家具を中心に考察するものである。竹芯籐張りの家具も本論では除外する。

### 2. 台湾の竹家具に使用される竹の種類

台湾の竹家具に使用される竹材は通常、桂竹と呼ばれる。この他に長枝竹、孟宗竹等が挙げられる。

家具に使用される竹として『中国竹類植物図志』<sup>3)</sup>では次のように述べられる。

台湾桂竹 (*P. makinoi* Hayata) は台湾では通常桂竹、あるいは桂竹仔と称し、福建省では棉竹、萎竹と称される。本種と剛竹 (*P. sulphurea* cv. *Viridis*) とは相似し、竹材堅牢、緻密で建築、造紙、竹椅、竹簾、傘骨、笛等に用いられる（図2）。

長枝竹については2種がある。長枝竹 (*B. dolichoclada* Hayata) は編組の篩、箕等の農具に使用される、とあり家具用材との記載はない。緑竹 (*D. oldhami* (Munro) Keng f.) の別名は、広西省では甜竹、吊絲竹、広東省では石竹、毛緑竹、台湾

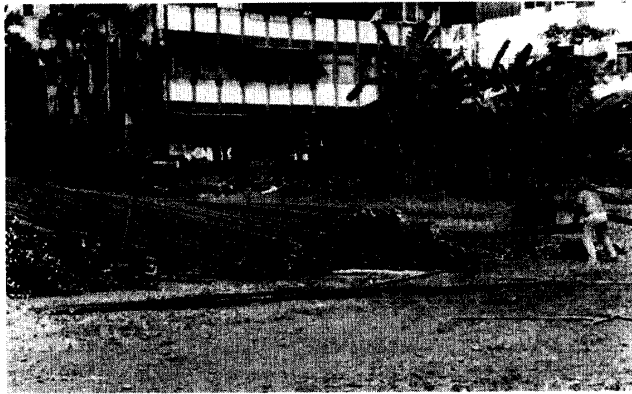


図2 桂竹の集荷 台湾南投県竹山

では鳥糞竹、長枝竹、郊脚緑である。家具、農具、あるいは編組の竹籠にも使用でき、紙の原料でもある。分布は浙南、福建、台湾、広東、広西と海南等の山谷、川辺に多く見られるという記載から、これが長枝竹であることが分かる。

毛竹 (*P.heterocyclus* var. *pubescens* (Mazal) Ohwi) の別名は、四川、湖南、江西、広西、湖北、貴州各省では楠竹、『植物名鑑』では江南竹とされる。『中国樹木分類学』や台湾では孟宗竹、茅竹。江西、広東両省では苗竹、広東省では苗衣竹、福建、浙江平野部では猫儿竹と称され、高さ10~20m、外径10~20cmで中国竹林面積の2/3以上を占める。

江南竹という呼称はそのまま鹿児島に受け継がれている。日本に孟宗竹が伝えられたのは当時の琉球を経て、薩摩藩に伝わり、それが関東まで北上したのであるが、主として筍としての有用性が孟宗竹林の勢いを強めたのである。

この他、台湾で使用される可能性があるのは麻竹 (*D.latiflorus* Munro) 等であるが、台湾で確認したところでは家具用材としては麻竹は向かないということである。

台湾の竹家具生産で使用される竹材は桂竹が主流で毛竹、つまり孟宗竹がそれに続く。長枝竹の使用については、戦前出版された『民俗台湾』<sup>4)</sup>にわずかに記載されるが、現在はほとんど使用されていない。

家具用材としての竹の種類は桂竹のように材質が硬く、全体の稈の太さが安定し、節の間隔が比

較的均等であることが特徴である。また孟宗竹のように稈の肉厚が厚いということも要点である。

ちなみに日本に自生するマダケは桂竹に近い特性を持っている。昭和42、3年京都西山のマダケ (*Phyllostachys bambusoides* Sieb.et Zucc) の花が咲き、一斉に枯れた年は京都の竹材店は急遽、台湾から桂竹を輸入したことがあるという。

### 3. 竹家具製作工程

台湾彰化県、南投県などでは、さまざまな種類の家具が製作されている。その最も基本的形態である腰掛け(図3.1, 3.2)の製作工程の概要

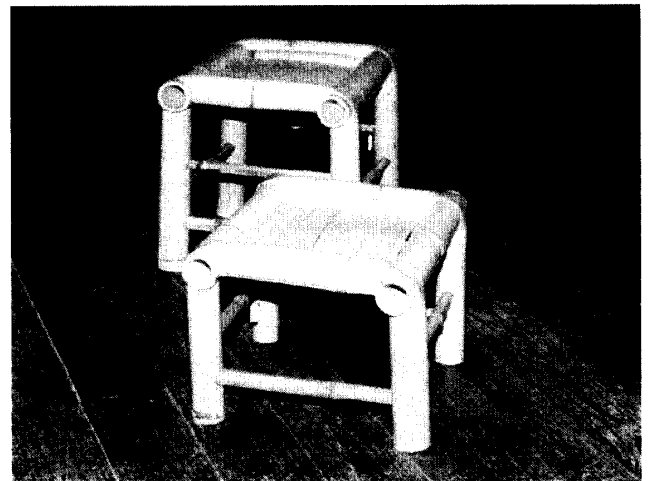


図3.1 竹の腰掛け

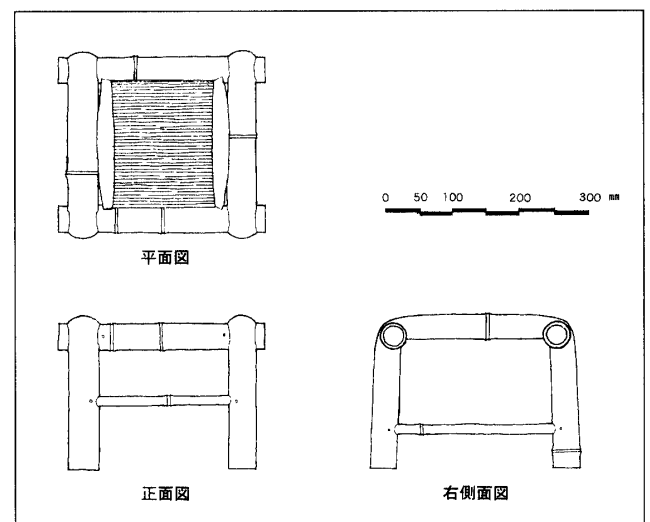


図3.2 竹の腰掛け実測図

は次の通りである。

1) 竹の伐採、運搬：竹家具製作をする者が直接行うことはない。竹は集荷され、それを必要に応じて購入するものである。竹の伐採時期について、孟宗竹は7月から8月、筍が出る直前が良いとされる。孟宗竹は4年生以上のものを使うが、その年の成長しきった時期ということで上記の時期の伐採となる。桂竹は孟宗竹より小径で、2年に1回伐採される。桂竹もやはり4年生のものが良いとされる。伐採時期は季節に関係ないともいわれるが、製作者の話では、秋の方が降雨量が少なくて良いという。桂竹林は標高800m以下で、800m以上になると孟宗竹林となる。

2) 苛性ソーダ溶液で蒸煮(図4)：特に孟宗竹は灰汁抜きをしないと虫害に遭うが、桂竹はそうでもないという。竹は18尺(5.45m)の長さで売られるもので、約4mの長さに繋いだドラム缶で蒸煮する。竹の全体が苛性ソーダ溶液に浸る状態

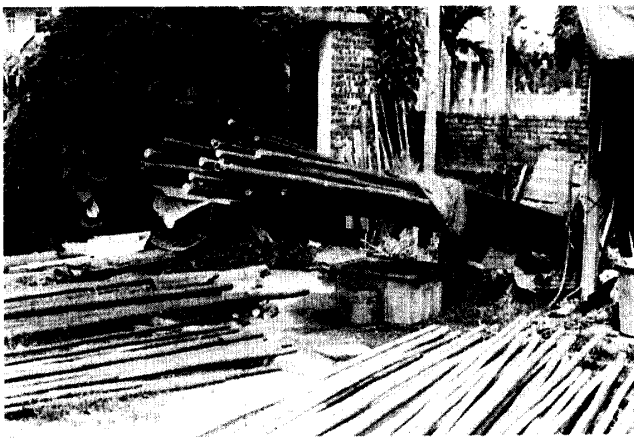


図4 孟宗竹を苛性ソーダ溶液で蒸煮

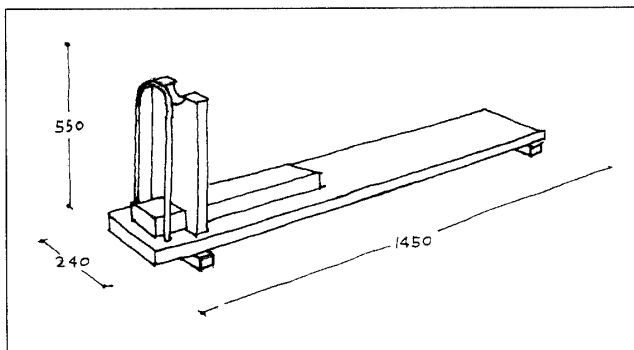


図5 竹材曲がり矯正用台

ではないので、1時間くらいで末と元をひっくり返して蒸煮する。

3) 乾燥：丸竹は煮沸後1~2ヶ月自然乾燥させるが、割竹は蒸煮することなく、そのまま天日乾燥させる。桂竹の場合はこの過程は省略される。曲げ加工があるため乾燥はせず、次の工程に移る。

4) 直径別部材仕分け：桂竹は細竹条、6-8分条、寸竹条、寸2分条、寸5分条、2寸の6種に仕分けする。

5) 稈を通直に矯正(図5)：曲がりがある竹はガスバーナーで加熱し、曲がり矯正用の台に挟み、稈の曲がりを矯正し、まっすぐにする。または焼き曲げ加工をする。

6) 部材寸法に丸鋸で鋸断。

7) 座面の平面を構成するひしぎ竹<sup>5)</sup>、丸竹、割竹の加工。

8) 座面部分組立。

9) 脚部加工部寸法取り。

10) 脚部曲げ部分、貫通し部加工(図6)、座面枠の丸竹をくわえ込むように曲げる部分は2~3mmの厚さに削られる。

11) 座面部、脚部の合わせ曲げ、仮止め。

12) 貫接合部竹釘打ち込み、組立完了となる。

最近ではクリア塗装をして欲しいという要望がある場合、この後、塗装を行うこともある。

#### 4. 竹家具の構造特性

竹家具の構造的特徴は単純な腰掛けであっても、複雑な様式を持つ椅子の場合も、次の技法が基本となっている。

- 1) 稈切り込み、曲げ加工による接合
- 2) 稈にV字カットを数カ所入れて曲げる方法
- 3) 細竹と太竹のさし込みと竹釘の栓をする接合
- 4) 割竹を稈にさし込む接合
- 5) ひしぎ竹で平面を作る方法
- 6) 稈の元、末口の差し込み接合

これが基本的な技法である。このうち特に1)の方法が重要である。彰化県二水郷の工房で使用される、作業のための腰掛け(図7作業台上腰掛



図6 腰掛け脚部稗切り込み



図7 腰掛け脚部と座面部

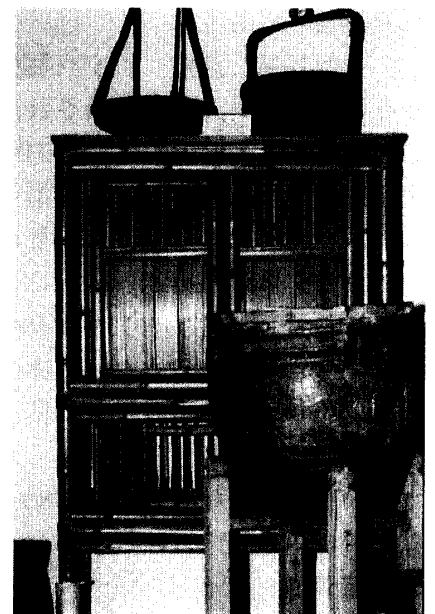


図8 食器食品戸棚=菜厨(南投県立文化中心蔵)

け)は3)と4)の技法が使用されているのみである。この接合方法は東南アジアの竹椅子にも見られるものである。

1)の技法が重要であるという理由は、背もたれのついた椅子や食器食品戸棚などの多くは稗竹に大きい切り込みを入れ、直行する竹の直径のほぼ3/4から全体をくわえ込む曲げ加工による接合技術が例外なく用いられているからである。曲げ加工をする部分はできるだけ薄くする必要がある。台湾の例では厚さ2~3mmにするという。その部分を直行する稗に密着させるため、ガスバーナーで焼き曲げを行う。

竹家具製作技術の基本的技法として6つの技法があり、そのうち稗切り込み、曲げ加工による直行部材接合は竹家具の剛性を高める基本的技法である。この手法に技法6)稗の元、末口の差し込み接合が加わることによって、食器・食品戸棚なども可能になり、各種の家具に適用され、豊富なデザインが可能となった。

## 5. 竹家具の種類

竹を素材とする生産、生活用具としては古今、アジア各地にみられるように編組品が圧倒的に多

い。

竹の編組技術ではなく、竹の稗をそのまま使用するものとしては、周知のようにビル建設現場の足場材がある。この他、大きなものでは筏、住宅の構造材が挙げられる。事実台湾では竹の軸組の家屋がかつてはあった。中国雲南省のタイ族の住居の構造材はかつては竹材であった。また竹の橋梁も挙げられる。

こうした大型の竹の構造物の他、主として室内で使用する家具類にはどのようなものがあるのだろうか。現在台湾で生産される竹家具の種類は、次の通りである。「」内は台湾の呼称である。

1) 高さ8寸, 1尺, 尺2寸またはそれ以上の高さの腰掛け=「竹椅・凳子」, 2) 食器食品戸棚=「菜厨」(図8), 3) 育児椅子兼腰掛け=「椅轎仔・乳母椅・母子椅」(図9), 4) 椅子類(小椅子=「公婆椅」(図10), 5) 肘掛け椅子=「圈椅」タイプ, 「官帽椅」タイプ, 1人用安楽椅子タイプ, 2人用安楽椅子タイプ等), 6) 寝椅子=「涼椅」(図11), 7) サイドテーブル=「茶几・小卓子」, 8) 乳母車=「竹車」(図12)(図13.1, 13.2, 13.3)等である。

この他、『中国家具博物館展品図録』<sup>6)</sup>、『竹藝之美』<sup>7)</sup>等には次のような項目が挙げられる。肘掛

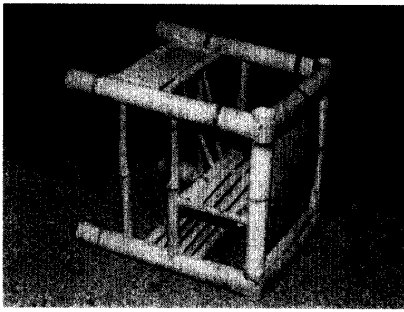


図9 育児椅子兼腰掛け=母子椅

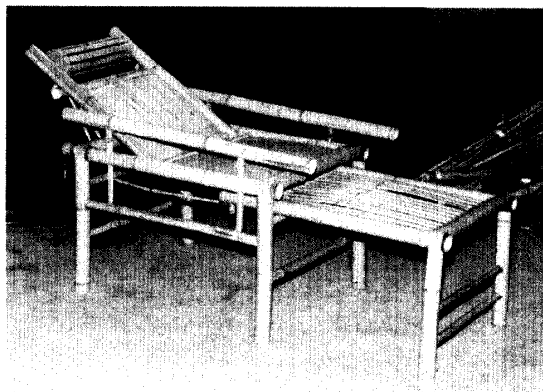


図11 寝椅子=涼椅 (大分県竹工芸・訓練支援センター蔵)

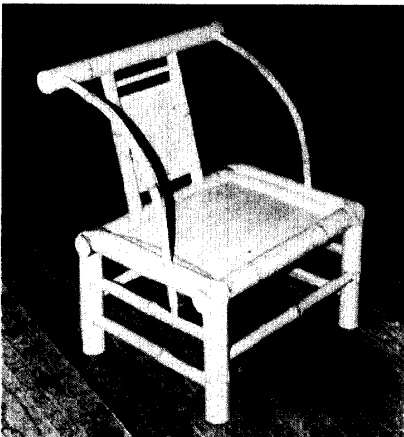


図10 小椅子=公婆椅 (大分県竹工芸・訓練支援センター蔵)

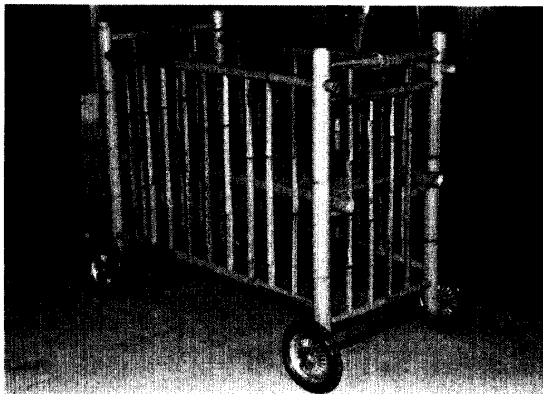


図12 乳母車 (ベビーサークル)=竹車



図13.1 乳母車 (『中国家具博物館展品 図録』より)

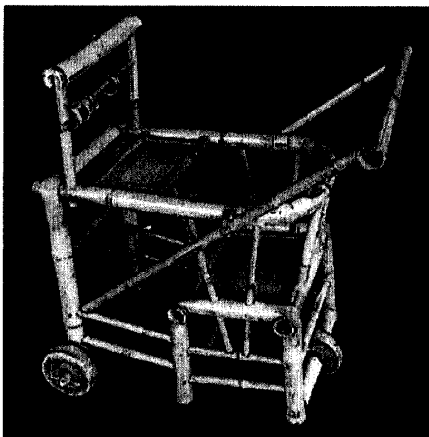


図13.2 乳母車 (『竹藝之美』より)



図13.3 新製品の乳母車 (台湾彰化県にて)

け椅子=「圓背太子椅」, キャノピー付きベッド=「竹眠床」, 食器棚付き食卓=「飯卓式菜厨」, 円形ちゃぶ台=「圓形矮茶几」, 書棚=「書厨」, ベンチ, 竹屏風, 犬小屋=「閉籠・寵物籠」, 麵屋台=「麵担子」, 輿などその種類は豊富である。

## 6. 中国・台湾の竹家具の歴史展開と位置づけ

6-1 中国から朝鮮半島, 日本へ伝播した竹家具  
 どのような竹家具がいつ頃から使用されてきたかということについては記録が少ない。竹家具の

形態が図として確認できるのは唐代の榻凳の事例がある(図14)。榻凳とは「榻」に上がり降りするときに

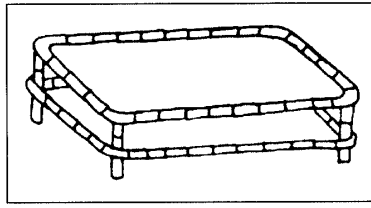


図14 唐代の榻菱

用いられるステップのようなものである。また宋代の竹椅子や凳が挙げられる(図15)<sup>8)</sup>。

宋代は椅子座のかたちが中国で一般化する時代であり、木製の椅子とともに竹椅子も製作されるようになったと考えられる。こうしたことから、遅くとも宋代には竹家具製作技術は普及し始めたと考えられる。特に宋代の竹椅子は禅僧が使用する場面が特徴である。

台湾の竹家具は明代の中・後期より福建省からの漢民族の流入とともに普及した。

中国、台湾の他の事例として、筆者がこれまでのところ確認できたもっとも早い例として、朝鮮朝の肖像画が挙げられる。全州崔氏門中蔵の「崔佐之影幀」(図16)は15世紀の作とされ、その解説には「その地方の特産品を愛用した<sup>9)</sup>」とあるが、朝鮮半島でも同様の竹家具製作技術があったのかどうかは不明である。筆者が全羅南道潭陽の竹工芸産地で確認した限りでは、その形態や技術

に近いものを確認することはできなかった。このことから考えられるのは、いったん中国から伝播した技術がなんらかの理由で途絶えてしまったのか、あるいはこの15世紀の竹几、竹椅は中国、当時の明からの将来品だったとみることもできる。

日本で竹の稈が家具として使用された絵画資料としては、室町時代、16世紀の、我が国の現存最古の自画像である雪村周継筆「自画像」(図17)がある。山中隠居の晩年の鹿皮の法被をかけた竹細工の座床にすわるという異色の像である<sup>10)</sup>。この事例では細かな座床の接合個所については読みとることができないが、竹の椅子がなんらかの方法で組み立てられていることは確かである。当時の山村生活と椅子製作技術については明確なことは分からないが、日本における竹椅子の事例として重要である。

こうした事例を見てくるとホームルの指摘には疑問が生ずる。彼は江西省の山村で見た竹の椅子と同様の構造を持つ木製の椅子に対して、「腕もたせを備えた



図15 宋代の竹椅子・竹凳

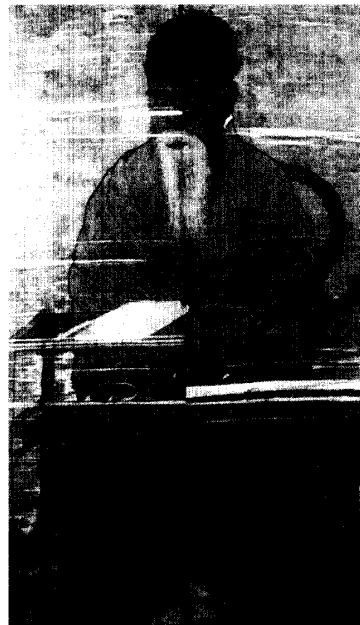


図16 崔德之影幀



図17 雪村筆「自画像」  
室町時代(大和文華館蔵)

背部はわれわれのウィンザー・ウェアを想起させる。このことは、われわれのデザインが中国人に影響を与えたことを示唆している、最も早いウィンザー・チェアの実用は18世紀よりそんなにさかのぼるものではないのだから、このタイプの椅子が中国で何世紀も前から使用されていたということはあるまい。」<sup>11)</sup>としている。彼が紹介する写真からは確かにデザインはどこかウィンザー・チェアの趣はあるが、アームレスト付きの椅子として「扶手椅」は明代様式のものもあり。脚部の

形態から中国の独自に展開した竹椅子の系統に属するものであると見るべきだろう。

### 6-2 浮世絵に見られる竹の縁台

日本における竹家具の初出は前述のように16世紀であるが、絵画に多く描かれるのは江戸時代の浮世絵においてである。しかも、竹家具の系統としては、庶民の家具であり、禅僧の座とは異なるものである。

日本の浮世絵には竹家具製作技法1と同様の構



図18 歌麿「夏の夕涼み」部分



図19 歌麿「夏衣裳当世美人／越後屋仕入のちぢみ向き」



図20 清長「四季八景 長夏夕照」



図21 春信「水辺の納涼美人」



図22 豊国「水無月 張物の図」

表1 『浮世絵聚花』にみる木と竹の縁台

美術館	page	fig.No.	作者	題名	制作年	竹	木
ボストン1	189		重信	きく酒屋むすめ	1730		木柶竹座面
	192		清満	なかむら松江の三浦あげまき			木
		8-10	清長	江の島詣り	1788		木
ボストン2	56	26	清長	茶見世十景 両国			木
	158	103	清長	風俗十二通景 汐十	1782		木
	163	122	清長	茶見世十景 やげん堀	1783		木
		151	清長	雪月花東風流中之町(花)	1789		木
ボストン3		30	歌麿	難波屋の店先	1793		木
		96-98		大黒屋店先			大黒屋店先
	188	176		青楼歌舞妓やつし画屏	1799		木毛氈敷き
シカゴ1	178	85	清信	市川團十郎の鬼王と市川外五郎の箱王丸	1727-1731		木
	194	148	豊信	吉原細見を見る佐野川市松			木
	199	171, 172	無款	水辺納涼美人		竹	
	200	176	春信	放し鳥			木
	206	198	春信	鬮鶏		竹	
	224	43	春信	かわら投げ			木
	227	53		風流やつし武者鑑			木
シカゴ2		6-7	清長	大川端の夕涼み			木
		38	無款(重政)	桜川の茶屋	1777		木
		42	清長	当世遊里美人合 上手筆	1783		木
		46, 47	清長	風俗東之錦 春の野遊び			木
		56, 57	清長	菖蒲園			木
	152	144	清長	座敷八景扇 子晴嵐		竹	
	156	161	清長	茶見世十景 富ヶ岡			木
	157	163	清長	浅草金龍山十景 裏田圃の茶見世			木
	159	169	清長	助六山縁江戸桜			木
	162	181-183	清長	吉原仲之店の桜			木
	162	184	清長	江之島詣			木
	165	191	清長	曾我祭			木
	170	207	春信	菖蒲園			木
	シカゴ3		19-21	歌麿	百花園		
		42-44	長喜	なにはや店先			木
166		133	栄之	風流十二月 南ママ			木
194		5	栄之	十二時四月		竹	
195		10	栄之	六歌仙康秀			木
211		69-71	栄之	茶店の煙草入細工			木
メトロポリタン ニューヨーク	68 124	33 104, 105	無款(重政) 歌麿(重政)	手さげ行燈 藤棚下の女たち 3枚続きの2		竹	木
フォッグ	68	16	豊信	忍岡花有所(しのぶをかはなのありか)		竹	木
	56	24-29	春英	芝居番付を争う娘たち	1793		木
	101	95	歌麿	松本幸四郎、中山富三郎、市川高麗蔵		竹	
	122	118	春信	夏衣裳当世美人 越後屋チヂミの			木
ミネアポリス	162	201-203	春山	小野小町			木
	165	2	無款	猿狩り			木
	169	16	春信	花狩り			木
	38	16	春信	見立玄宗楊貴妃	1770	竹	木
	180	5	清信	三味線を弾く男女			木
	180	5	清信	早川新勝			木
ホノルル	145	86	春信	笠森お仙と若侍			木
	170	35, 36	清長	風俗東之錦 萩の庭			木
	177	186-188	重長	三幅対ひよくの三曲			木
	178	193	春信	かぎやお仙			木
ギメ	189	221	清信	そがの助六			木
	84	40	長喜	月見		竹	
	142	131	春潮	役者と茶屋の女			木
	179		清長	美名見新庭袖ケ園春ノ景		竹	木
バルギー	203		春潮	寄鶯恋			木
	168	29	春信	お仙の猫じゃらし		竹	
ベルリン	176	143-145	歌麿	風流六玉川武蔵、陸奥、紀伊			木
	27	9-10	栄之	風流屋つし源氏			木
	34	12	無款	髪をなおす遊女、まさつね			木
	49	49	春信	縁台夕涼み			木
東博	141	121	師胤	腰掛け美人	1718		木
	139	97	春信	お仙の茶屋			木
	162	184	可候(北斎)	伊達与作	昭和		木
	166	187	師政	梅花美人図	宝楽享保		木
	199	62	栄里	大文字屋内誰か袖			木
	233	14	歌麿	縁台針仕事		竹	木
フリーア	14	3	長春	柳下納涼図			木
	102	40	春章	柳下双美人		竹	
	120	44	無款(重政)	待乳山三美人図			木
	96	45	春信	喜撰法師			木
ボストン補1	148	90	春信	水辺で涼みながら月を見る女		竹	
	166	177	春信	水辺で涼む女	1765	竹	
	179	292	春信	鶏合わせ		竹	
	88	359	春信	鍵屋お仙と猫を抱く若衆	1769		木
	92	361	春信	鍵屋を訪ねたお藤に茶を出すお仙	1769-70		木
	104	368	春信	鉢から龍を出す女	1767-68	竹	
	108	371	二代春信	庭で夕涼みする男女	1771-72		木
国貞 国芳 英泉	147	487	春信	一つの三味線をともに弾く男女		竹	木
	147	488	春信	一つの胡弓をともに弾く男女		竹	木
合計	90	71	国貞	七小町 見立そとは		19例	63例



造の縁台が描かれている。例を挙げると喜多川歌麿「夏の夕涼み」(図18)<sup>12)</sup>や「夏衣裳当世美人・越後屋仕入れのちぢみ向キ」(図19), 鳥居清長「四季八景 長夏夕照」(図20), 鈴木春信「水辺の納涼美人」(図21)<sup>13)</sup>。歌川豊国「水無月 張物の図」(図22)<sup>14)</sup>等であるが、いずれも18世紀から19世紀にかけて描かれたものである。

しかし、浮世絵に描かれた竹の縁台は木の縁台に比べ、相対的に少ない。『浮世絵聚花』<sup>15)</sup>の中で、建物に付随する縁台を除き、描かれた独立の縁台は総数82例で、木製縁台が63例、竹の縁台は19例である。これらの浮世絵は18世紀後半から19世紀初頭に制作されたものである。したがって江戸時代の中後期には、竹の縁台が一定の流行を見たと考えられるが、その形態のバリエーションはそれほど豊富ではなかった。

この竹の縁台製作技術について、前述の雪村「自画像」との関係性を考慮に入れることは難しい。浮世絵に描かれた構造の竹の縁台の製作技術は、中国から何らかのかたちで日本に伝播したものと考えられる。

その伝播のパターンは1) 清国から竹の縁台そのものがもたらされたのか、2) 製作技術をもつ中国人が日本で製作したか、3) あるいは当時の中国の技術を知り得た日本の職人が製作したの

か、4) 国内で独自に技術を編み出したのかというようなケースが考えられるが、4) の場合は考えにくい。いずれにせよ中国江南の竹家具製作技術やデザインとの関係性を考慮に入れるべきだと考える。

ちなみに台湾で竹家具を永く製作してきた許正氏に聞いた話では「昭和10年くらいに竹家具職人が日本に渡ったことがある。」という。もちろん、当時の台湾は日本支配下の時期にあり、単純に比較はできないが、こうした例と似たようなことが江戸期にあったと考えられなくもない。

### 6-3 欧米における竹家具

竹家具が欧米に渡った例としては、次のようなものがある。18世紀のものとしてされるジョージ・スペンサー・コレクションの『バンブー・キャビネット』(図23)<sup>16)</sup>。コペンハーゲン美術工芸博物館蔵の1790年にデンマークの商人のカントリーハウスのために製作された椅子(図24)。パリ国立博物館蔵の1819年にもたらされたセントヘレナのナポレオンのための2脚1対のアームチェア(図25)。1810年のロードアイランドの神意歴史協会蔵のリクライニングチェア(図26)は、その解説によると「18世紀のものと推察される」としている<sup>17)</sup>。

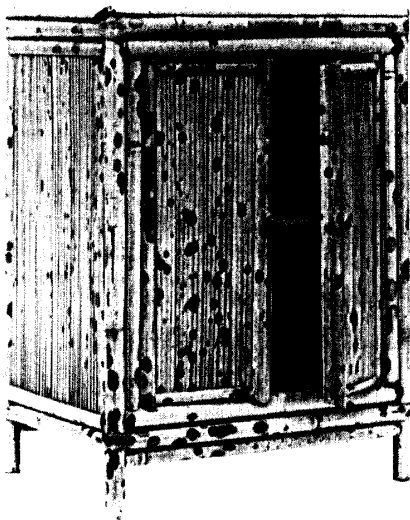


図23 バンブーキャビネット

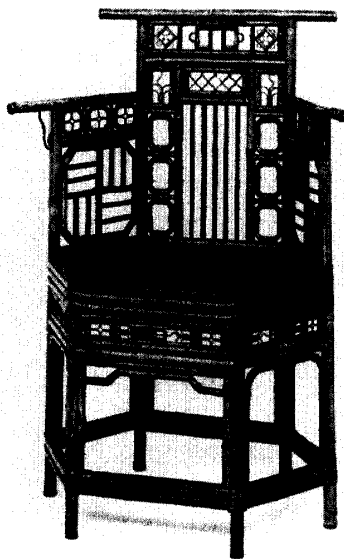


図24 デンマーク商人のために製作された椅子

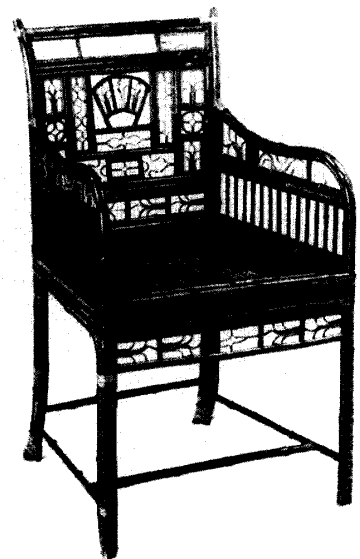


図25 セントヘレナのナポレオンのアームチェア

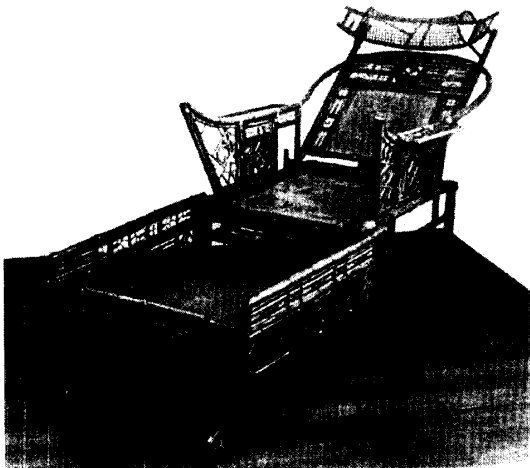


図26 リクライニングチェア



図27 竹を模した椅子 1802年

こうした事例はいずれも18世紀から19世紀にかけて欧米に舶載されたものだということができる。ヨーロッパの事例はいずれも細かな細工が施されている。

基本的には中国や台湾では軽便な庶民性を伴った家具として位置づけられるが、もう一方、宋代から禅僧

や文人が好んだ斑竹 (*P. bambusoides f. lacrimadeae* Keng f. et Wen) の竹家具もあった。それに加えヨーロッパからの注文で装飾性豊かな種類の家具に変貌しているのである。

(図27) のトーマス・シェラトンの椅子<sup>18)</sup>にみるように木材で竹椅子の雰囲気を持つものがデザインされ、これと同様なものは1904年のゲブリュー・トーネット社のカタログにも見ることができる。竹に似せた曲げ木を構造部材とする一連の家具がカタログ化されている<sup>19)</sup>。もっとも前述の技法1)の構造にはなっていない。

竹家具は西欧においてはシノワズリーに連なる

東洋へのエキゾチシズムをかきたたせたものであったのではないか。

## 7. 現代の竹家具

中国清末の『清朝絵師呉友如の事件帖』<sup>20)</sup>にも木製家具のなかに竹の腰掛け、椅子、食器棚などが散見され、当時の日常生活に竹家具はごく自然に使用されていた実態がうかがわれる。

また四川省や江蘇省などの竹椅子も『中國民間美術全集起居編・陳設巻』<sup>21)</sup>に紹介され、一定の位置づけがなされている。

現在も中国の竹が生育する地域では、竹家具が生産されている。この竹家具の使われ方をみると、あくまでも木製の家具が生活空間の中では中心で、高齢者や安楽椅子や、補助的に使用される腰掛け、椅子というようなケースが多い。永続性のある家具という位置づけではなく、軽便で寿命の短い消耗品的なものだという観念が横たわっているようだ。

ただ台湾では1910年から1930年にかけて竹家具生産が最盛期を迎えたという事実から、暮らしの近代化イメージと連動していたと考えられる。

1949年以降、国民党軍が台湾に来てからしばらくベッド生産が盛んとなった時期があるという。

1960年代から極端に需要が少なくなったが、最近、環境に良い素材だという見直しの中で幾分持ち直し、生産が行われている。2001年南投県、彰化県を訪ねたとき、竹家具を製造、販売する沈萬益氏によると、現在は住宅用の家具より店舗用の家具の需要が増えているということであった。前年の大地震の被害を受けたレストランなどが営業を再開する際の、店舗用の椅子、テーブルなどの新たな商品の開発も行われている。

ただ、台湾に竹家具職人は恐らく50人とはいないのではないかという現状が気にかかる。

竹家具はプラスチックの軽便で廉価な椅子、腰掛けなどと競合するものだから、次第に生産は少なくなっている。

竹の生育の早さと、物の廃棄の過程を考えると、

今後竹家具の再評価がなされるべきだと思うし、新たなデザインの提案もあってしかるべきだと考えられる。

## 8. 結び

中国や台湾で現在生産される竹家具の基本的技法には6種の接合法がある。特に稈を切り込み、曲げ加工をし、直交する稈と接合する技法は重要であり、こうした技法を伴う竹家具製作技術は遅くとも宋代には確立していたとすることができる。その形態は韓国や日本の中世の絵画にも見ることができる。その後18世紀から19世紀にかけて、日本では縁台が多く製作されるようになり、また西欧の注文に応じ、多彩なデザインの多様な家具が登場するようになった。西欧においてはアジアに対するエキゾチシズムと連動し、竹家具は一種の装飾的要素として舶載された。

その中で中国や台湾の庶民の家具として今日まで、その基本形が保持されてきた。

これらの竹家具の使われ方を見ると、生活空間を構成する家具は木製が中心で、竹家具は安楽椅子や補助的に使用される腰掛けが多い。永続性のある家具という位置づけではなく、軽便で寿命の短い消耗品的なものという観念が横たわっている。

しかし一方では、禅僧や儒学者が使用することにも見られるように、歴史的に風雅、洒脱な家具という側面も継続してきた。

また台湾の竹家具については、暮らしの近代化イメージと重なり、その種類、生産量が増えたものと考えられる。

現代日本の竹家具はどうかというと、1955（昭和30）年頃までは京都では竹の縁台（京都では「床几」という）が町の点景として、ごく普通に見られるものだった。現在も京都で竹の縁台の製作技術は継承されており、この製作技術の詳細については、今後の課題としたい。

## 謝辞

この研究過程で本学芸術研究科教授 成瀬不二雄先生にご教示いただき、図版まで頂いたことを記し、感謝申し上げる次第である。

## 付記

本稿は次の発表結果を修正、加筆したものである。

- 1) 車政弘・郭永傑「竹家具の構造とデザイン」『第47回日本デザイン学会研究発表大会概要集』pp.72-73,2000
- 2) 車政弘「台湾の竹家具生産とデザイン」(社)日本木材加工技術協会編『木材工業』56(5),pp.230-233,2001
- 3) 車政弘「中国竹家具のひろがり」(社)日本木材加工技術協会編『木材工業』56(6),pp.279-282,2001

## 注

- 1) 車政弘：中国の腰掛けと椅子－中国の常民家具デザイナー－、アノニマスデザインを考える、日本デザイン学会誌、デザイン学研究特集号、第1巻第2号、pp.28-35,1993
- 2) ルドルフP. ホムメル 国分直一訳：中国手工業誌、法政大学出版局、1992
- 3) 朱石麟 馬乃訓 傅懋毅：中国竹類植物図志、中国林業出版社、1994
- 4) 末次保、金関丈夫編：民俗臺灣、東都書籍、1941年から1945年にかけて出版された月刊誌。南天書局有限公司、1998全冊復刻
- 5) 丸竹を押し挫（ひし）ぎたるもので、通常半丸に割り、節を除きながら竹の繊維に沿って特殊な金槌で小割りし、弾力のある平面を得ること。
- 6) 江韶瑩：中国家具博物館展品図録、投園県立文化中心、1993
- 7) 南投県立文化中心編：竹藝之美、南投県立文化中心、1992
- 8) 李徳喜 陳善銘：中国古典家具、華中理工大学出版社、1998。唐画「六尊者像」p.178及び、宋画「白猫罗汉图冊」p.276

- 9) 李泰浩「図版解説」 p.170, p.171, 安輝濬, 國寶10 絵画, 藝耕産業社, 1984
- 10) 大和文華館所蔵品目録2 絵画・書蹟 p.200, 1990
- 11) ルドルフ P. ホムメル 国分直一訳: 前掲, p.485
- 12) 福岡市美術館編: 大歌麿展, テレビ西日本, 1998
- 13) 座右宝刊行会: 浮世絵体系2, 4, 6, 集英社, 1973-1975
- 14) 辻惟雄 大久保純一 折橋俊英: 原色日本の美術18 浮世絵, 小学館, 1994
- 15) 浮世絵聚花全16巻, 補巻2, 小学館, 1978
- 16) Tseng Tu-ho Ecke: *Chinese Folk Art 2 In American Collections From Early 15th Century to Early 20th Century*, The University Press of Hawaii. p.5, 1977
- 17) Michel Beurdely: *Chinese Furniture*, Kodansha International, p.50, 1979
- 18) Ralph Fastnege: *SHERATON FURNITURE, ANTIQUE COLLECTORS' CLUB*, 145, 1983
- 19) Thonet *Thonet Bentwood and Other Furniture The 1904 Illustrated Catalogue*, Dover Publications, Inc. pp.95-99, 1980, には竹に似せた曲げ木を構造部材とする一連の家具がカタログ化されているが, 前述接合技術1)の技法は採られていない。すべて曲げ加工と木ネジによる接合となっている。
- 20) 武田雅哉: 清朝絵師呉友如の事件帖, 作品社, 1998
- 21) 王朝聞總主編: 中國民間美術全集4 起居編・陳設巻, 華一書局, 1994